
雅 薫の陽気

長門 有希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雅 薫の陽気

【Nコード】

N2124K

【作者名】

長門 有希

【あらすじ】

地元の中学から高校へと進学した悠一達は幼馴染の薫に振り回されていく…。謎の少女、篠原のたくらみは…。果たして悠一の運命はいかに

陽気に出てくるお話は中学を卒業してから高校入学するまでの彼岸話

(プロローグ)

テーマ：小説

アムニティー

世の中は不景気などリストラ等騒いでいるが、

俺には知ったこっちゃねえや…何てね！

季節は桜前線北上中の最中である。 >br<

俺は中学最期の頃合いを幼馴染みの薫とその面々等で過ごしている。

>br<

ちなみに俺の名前は悠一と言っところ。 >br<

2

卒業を間直に控えたある日。 >br<

薫は何を想ったのか突然こんな事を言い出した。 >br<

「悠一は勉強する意味があると想う？私はそうは思わない。 >br<

だってこんな世の中だから…。 >br<

せめて高校だけは出るけど。 >br<

がくれきつんぬん
学歴云々ってやつは今は関係ないと思うのよね！」 >br <

（はあ！長々と喋るな）と思いつつ合間にちよこちよこ相槌あしづを入れながら、 >br <

俺はオレで違う事を考えていたのだが…。 >br <

(一章)

テーマ：小説フメニチイ>br<

薫からグラグラ言われてから次の日。>br<

登校途中、後から声をかけながら走って来るのは同じクラスの和泉だ。>br<

「よお悠一！急がないと遅刻するぞ。」>br<

と良いながら去って行った。>br<

俺は時計を見て咄嗟とつぱに慌てて走り出した。>br<

何とか遅刻は免れたが、>br<

自分の席に着くと否や隣に座っていた薫が俺の方を向いて>br<

「今日、半日で授業終だからどこか行かない？どうせ暇でしょ？」>br<

「まあ良いけど、どこ行くんだ？」>br<

「何処でも良いわよ！」>br<

「…」>br<

「私、想うのよ卒業まで一週間くらいしか無いじゃない？>br<

だったら思い出作りくらい良いんじゃない!」>br<

こんな話しをしていると担任が入って来たのを>br<

横目で確認すると前へと向き直った。>br<

四時限目の終礼チャイムが鳴ると否や隣の席にいた>br<

薫が声をかけようとしているところに和泉がやって来て>br<

「ちょっと付き合え」>br<

と言われるがままに階段の踊り場に連れて行かれ、>br<

そこには他クラスの奴が2、3人座り込んで>br<

俺達が来るのを待つてる様に見えた。>br<

「待たしたな!」>br<

「そつでもない!」>br<

「御呼び立てしてすいません!」>br<

実はこのあと付き合ってもらいたい場所が在るのですが、>br<

構いませんか?もしご都合が合えばの話ですが…。」>br<

ちょうどそのタイミングで予鈴が木霊した。 > b r <

「ホームルームが終り次第もう一度確認に行きますので > b r <

それまでに考えといてください。」 > b r r <

男たちは用件を言い終わると踵を返し、階段を降りて行った。 > b

r <

「はあ」 > b r r <

なんだなんだ一体何なんだあいつ等は。 > b r <

俺はあいつ等とまともに話しすらした事無いぞ！ > b r r <

何かの間違いか！ > b r r <

「いいえそうじゃありません！我々は目的を持って貴方の処に > b

r <

出向いた訳ですから…。 > b r r <

いずれ貴方にも解る時が来まよ！」 > b r r <

何気なくそう呟いたのは、小柄な女子生徒だった。 > b r r <

女子生徒は木村の顔を認めると、 > b r r <

「貴方は近いうち興味を持つはず」 > b r r <

そう言つと、階段に腰を下ろしこちらの様子を伺つて居る様に見える。
た。 > b r <

「和泉はあいつ等と知り合いか？」 > b r <

「違うけど、余り気にするな！」 > b r <

「ところでお前は行くのか？」 > b r <

と和泉に問い掛けた時だった！突然耳元で > b r <

「悠一君達戻つた方が良いでしょうよ！」 > b r <

今こちらに薫さん向かっている…」 > b r <

と囁く声が聞こえ、振向くと円らかな眸ひとみが俺を凝視していた。 > b r <

動揺した俺は表面に出さずに、唯、只管堪えていた。 > b r <

然し、女子生徒は表情一つ変えずに > b r <

俺の額辺りを見つめたままフリーズしている。 > b r <

俺は咄嗟にその場から離れ自分のクラスに戻つて行つた。 > b r <

「なあ、和泉！あいつらは何で俺を誘つたのかな？」 > b r <

「俺には解らんないで、行くんだらう？」 > b r <

「知ってるとは想うが薫との…」 > b r <

「私なんだったって?」>br<

「何でもない!」>br<

と言いつつ、でもどうしよう薫がわざわざルンルン気分で迎に来たと言つのに>br<

此処で断って気まずい空気が流れるのも避けたい処だ。>br<

まで待てさっきはこつも言ってたな>br<

『都合が合えばの話ですが』>br<

とか言ってたな、取り合えず今回は見送りにしよう。>br<

「あのさ和泉、あいつらに伝言頼んで良いか?>br<

『今日は無理だから明日にして!』と伝えてくれ!」>br<

「解った!」>br<

そして放課後…。>br<

制服姿のまま界限かいわいへと繰り出した。>br<

「最初は腹はら拵ひらえしたいわね」>br<

と言われ、ファーストフードに入り少し話しをして店を後にした。

> b r <

次に来たのはカラオケ、バッティングセンター、ボウリング> b r <
最後が行きつけの喫茶店である。> b r <

今日は疲れるな!> b r <

「すみません、カフェラテとカプチーノ」> b r <

むろん独り言ではなくウェイトレスに注文したのだが、> b r <

ちなみに俺はラテの方だ。> b r <

「今日はどうだった?少しは楽しめたか?」> b r <

「まあそこそこね。そういえば明日で卒業だけど、> b r <

高校行くんでしょ?何処の学校行くの?」> b r <

「俺か、三校。古河^{こが}三高だけど、薫は?」> b r <

笑顔で「一緒、三高よ!」> b r <

何が嬉しいやら解らんな!> b r <

「和泉も三校だったよ。」> b r <

「あっそう!」> b r <

顰めつ面に答えた。俺、変な事言つたかな！>br<

興味のない話題を振つたせいか！>br<

卒業式も無事終り校門近くで和みムードが流れる中、>br<

見覚えのある姿が俺の方へと近づいて来た。>br<

昨日帰り際に会話した女子生徒だった。>br<

と想い気や俺の胸ポケットに紙切れをすつと入れ、耳元で>br<

「暇になったら読んで…」と言うと人込み紛れる様に去って行った

！>br<

何だろうな…。>br<

「悠一！　こんな処に居たのね！　帰るわよ。」>br<

薫はそう言つと俺の衿元えりもとを持って引きずるように引つ張って行った。

>br<

今度は何処に行くのかな？>br<

(二章)

テーマ：ラブ・ミュージック小説 >br<

>br<

>br<

卒業式も無事に終りその日の午後、 >br<

>br<

薫に連れられて行った場所はカラオケボックスだった。 >br<

>br<

俺は連日に亘り、薫の歌を聞かされる羽目になってしまい、 >br<

>br<

誰でも良いから交代してもらいたいもんだ！ >br<

>br<

けしてけなす意味ではなく、 >br<

>br<

『下手くそ』とか『音痴』ではなく、逆に『上手すぎる』の方だ。

>br<

>br<

然し嫌がる要素は何処にも無いように聞こえるが、 >br<

>br<

実は薫の歌声はめっちゃめっちゃハスキーなのだ！ >br<

>br<

考えもraitたい、何時間もの間、 >br<

>br<

密室の中ハスキートーンを聞かされた日には >br<

>br<

頭が狂いそうに成るのは目に見えている！ >br<

>br<

もしハスキー好きの人がいるならいつでも紹介するのだが…。>br<

>br<
5時間もの間、唄い続けた揚げ句、薫の顔は疲れはてて、>br<

>br<
いかにも長蛇の中に立たされ、>br<

>br<
ようやく順番が廻って来た手前で「sould out」になり崩れ落ちた面だった。>br<

>br<
>br<
>br<

その後、薫と別れ黄昏に染まる家路を歩んで>br<

>br<
ふと女子生徒から渡されたメモ用紙の存在に気付き、>br<

>br<
ポケットからメモを取出すと、暫し凝視した。>br<

>br<
「今夜9時、駅前のロータリーで待ってます。 篠原」>br<

>br<
まさか、デートのお誘いかな？俺は時間を確認すると8時半を回っていた。>br<

>br<
俺は慌てて駅へと向かった。>br<

>br<
>br<
>br<

ギリギリ5分前に着いたのだが、>br<

>br<
既に篠原がベンチにちょこんと坐って待っていた。>br<

> b r <
当たり前と言えはそうなるが > b r <
> b r <
「待たして悪い」 > b r <
> b r <
「そつでも無い」 > b r <
> b r <
「ところでこんな時間に呼び出すって…急ぎの用か？」 > b r <
> b r <
「私と一緒に行ってもらいたい場所がある」 > b r <
> b r <
「何処に？」 > b r <
> b r <
「ついて来て」 > b r <
> b r <
それ以降の返答は無かった。 > b r <
> b r <
俺は少し躊躇ちゅうちゅうしながらも篠原と駅前からタクシーに乗り郊外へと向
かった。 > b r <
> b r <
> b r <
> b r <
目的地に着くとこれまた見覚えのある姿が > b r <
> b r <
こちらに気づき会釈している様に見えたのは俺の気のせいか > b r <
> b r <
そいつは和泉だった。 > b r <
> b r <
あいつだったら気軽に電話でもして来るはずだが、 > b r <
> b r <

篠原をパシリに使って俺に何の用だろう>br<

>br<

「よう、どうした死人でも見たような面して、何か有ったか？」>

br<

>br<

「ああ、ちよつとな」>br<

>br<

「何だよ呼び出しといて…。」>br<

>br<

「実はお前に頼みが有つてな…。」>br<

>br<

「何だ」>br<

>br<

「ついて来い」>br<

>br<

今度は何処に行くのかな！>br<

>br<

黙って付いて行くとそこは自動車整備工場だった。>br<

>br<

此処で何をする気だ！俺に整備士にでもなれというのか？>br<

>br<

「悠一は車に興味在るか？」>br<

>br<

「嫌いではないが、何でだ？」>br<

>br<

「じゃあこれを転がしてみないか？」>br<

>br<

と言いながらシートカバーを剥いだ物は当然だが車に決まってる。

>br<

>br<

それ以外の何物でもないはずだ！>br<
>br<
「これをどうしようかと云うんだ？」狼狽うろたえながら俺は問い質すと、
>br<
>br<
無表情のまま口を開いたのは篠原だ。>br<
>br<
「貴方の為にこの車種を選択した。」>br<
>br<
そんな事言われても俺は無免許か免許を取得出来る歳ではないのだ
！>br<
>br<
確かに車種は俺が好きな奴でそこそこ弄ってる様だったが…。>br<
>br<
そんな事を夢想していると、突然轟音が鳴り響き、>br<
>br<
咄嗟に振り返ると和泉達は車の鍵を開け乗り込むところだった！>br<
>br<
「おいッ、ちょっと何やってるんだ！」>br<
>br<
俺は慌てて車に近寄り降りるよう促すが、>br<
>br<
聞くはずもなく俺も渋々同乗する羽目になっちまった！>br<
>br<
何が有っても俺は知らん…。>br<
>br<

(三章)

テーマ：小説フメニチヤイ>br<

>br<

>br<

陽も暮れて辺りは街灯とネオンで>br<

>br<

白昼とはまた違う雰囲気^キが広がっている。>br<

>br<

俺はと言つと篠原に呼び出され、今は整備工場に居るのだが、>br<

>br<

和泉は一体何を遣りたいのか…。>br<

>br<

「早く乗れ!」>br<

>br<

俺は慌ててナビシートに腰を落ち着かせたのを>br<

>br<

確認すると和泉は車を出した。>br<

>br<

>br<

>br<

「どこ行くんだ?」>br<

>br<

「ちよつとしたイベントだよ!」>br<

>br<

「でもよ!」>br<

>br<

もしそこに向かう最中にポリにでも出くわしたらどうするつもりだ。

> b r <

> b r <

俺はまだ前科など欲しくないぞ！」> b r <

> b r <

「大丈夫」篠原はそう言うのと俺の顔を凝視し、無表情でこう言った。

> b r <

> b r <

「おい和泉、お前この車何処から調達したんだ？窃盗でもしたのか

？」> b r <

> b r <

「それはちょっと皮肉ですね。> b r <

> b r <

とは言え現実はその語ってますから否定する余地はありませんが…。

「> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

そうこうしている内に目的地に着いたようで> b r <

> b r <

和泉が「辺鄙へんびな場所ですが着きましたよ！」> b r <

> b r <

「此処は…日光か？」> b r <

> b r <

「その通りです。」> b r <

> b r <

どうしてまた日光なんだと思いつつ篠原が俺の顔をロックオンした

まま> b r <

> b r <

「此処で貴方に遣ってもらいたい事がある。」> b r <

> b r <

と言われても此処で何をしろって言うんだ。 > b r <

> b r <

周りは街灯だけでコンビニもないし在るのは自販機くらいだろう。

> b r <

> b r <

「此処にお連れしたのは他に在りません。 > b r <

> b r <

此処で車を乗りならしていただきます。」「 > b r <

> b r <

語りはじめたと想ったら何を言ってるんだかこの男は… > b r <

> b r <

微笑を浮かべていやがる。 > b r <

> b r <

「解っているが敢えて聞く、誰がやるんだそれを?。」 > b r <

> b r <

「解っているなら敢えて言いませんが、是非と言つのならお知らせします。 > b r <

> b r <

貴方にやって頂きます!もし、心配事が在るならご安心下さい。 >

b r <

> b r <

我々と同行されてる最中は問題ありません。」「 > b r <

> b r <

「どつという事だ?。」 > b r <

> b r <

「それを聞くなら僕ではなく篠原さんに聞いた方が早いと思います
が… > b r <

> b r <

今の段階では喋ってくれるかどうかですが…。取り合えず始めまし

よ！」>br<

>br<

とは言え「心配するな」と言われてもなんだか心細いよな！>br<

>br<

それに詳しい事は後回しだと、解らん！>br<

>br<

>br<

>br<

俺らは車に乗り込み和泉は0円スマイルを浮かべ、ナビシートに腰掛けている>br<

>br<

篠原は後部座席で読書している様は>br<

>br<

蠟人形のように呼吸も瞬きもしていない様で…>br<

>br<

皮膚呼吸でもしているのだから>br<

>br<

「それは出発しましょう、エンジンを駆けて下さい。」>br<

>br<

俺は言われたようにエンジンを駆け走り出そうと想い>br<

>br<

サイドを下げアクセルを踏むが吹かす事しか出来ない>br<

>br<

ふと気付きシフトを1速に入れまたペダルを踏んだら>br<

>br<

一瞬走り、エンジンが止まった。>br<

>br<

「エンストですね！しょうがないですね」>br<

>br<

「っってお前、何も指示してないだろ」>br<

> b r r <
「確かにそうですが、エンジンを・迄でその後は> b r r <
> b r r <
質問やら次の指示を仰ぐまで> b r r <
> b r r <
お待ちする事も出来ましたよ！まあ良いです。エンジンを駆け下さ
い。」> b r r <
> b r r <
そう言つと和泉は車から降りボンネットの前に立った。> b r r <
> b r r <
俺はキーを回しエンジンを駆けるにも掛からない。> b r r <
> b r r <
和泉は確信した面持ちでボンネットを開け何かをやっている> b r r <
> b r r <
「なあ篠原、和泉は何やってるんだ？」> b r r <
> b r r <
「クラッチが外れたから繋いでる」> b r r <
> b r r <
と無表情で応える。しばらくすると和泉はボンネットを閉め車に乗
り込んだ！> b r r <
> b r r <
「ではもう一度エンジンを駆けて下さい。」> b r r <
> b r r <
また俺はキーを回した。> b r r <
> b r r <
「まず、ブレーキを踏んだままクラッチを踏みシフトを1速に入
れてみて下さい。」> b r r <
> b r r <
「やっつてるぞ」> b r r <
> b r r <

「では出発しましょう。」 > b r r <

> b r r <

まずは一つずつ遣りましょう。 > b r r <

> b r r <

ブレーキを放しアクセルを踏むと同時にクラッチを放して下さい。」

> b r r <

> b r r <

「つてむずいな！」取り合えず1速までの段階だからここからがキツイ。 > b r r <

> b r r <

> b r r <

> b r r <

数日後、俺は毎晩の如く練習に励みその甲斐在って。 > b r r <

> b r r <

ようやくまともに走行出来るレベルになった。 > b r r <

> b r r <

(四章)

テーマ：小説フメニチャー>br<

>br<

>br<

入学式まであと一日となった前日、俺は薫と居た。>br<

>br<

何故かと言つと薫が朝方に電話を寄越して来てこつ告げた。>br<

>br<

「今日、暇でしょ？今日で中学生生活も納め時だから>br<

>br<

今日という日を存分に楽しみましょ？」>br<

>br<

等と言われ現時にいる訳で、>br<

>br<

何をして過ごそつと頭を捻り返している処だつた。>br<

>br<

そんな処を見ていた篠原が声を駆けてきた>br<

>br<

「何をそんなに考えてるの？」>br<

>br<

別に深意になつてゐる訳じゃないのだが、>br<

>br<

然し何故篠原が居るか言つと>br<

>br<

朝の電話の続きになるが薫がいかにも二人で遊ぶよつな話振りな
ので>br<

>br<

仕方無く俺が > b r <

> b r <

「他にも誘ってもいいのか？」 > b r <

> b r <

つて聞き薫は渋々 > b r <

> b r <

「まあ良いわ！二人よりも大人数の方が楽しいでしょ」 > b r <

> b r <

とあっさり了承を得たというものだ。 > b r <

> b r <

なので今いるメンバーは薫、篠原、和泉、俺の計四人である。 > b

r <

> b r <

現時刻は十時を過ぎた辺りで今は > b r <

> b r <

駅前の喫茶店で休憩を兼ねて打ち合わせをしている処だ。 > b r <

> b r <

「ねえ！一休みしたところで次の予定は決まったの？」 > b r <

> b r <

と言いながら薫はカフェ・ラテを一口啜った。 > b r <

> b r <

「そうですね！ポウリングはいかかですか？」 > b r <

> b r <

微笑を浮かべて適当に応えたのは和泉だ。 > b r <

> b r <

しばし沈黙を保ったのうち、 > b r <

> b r <

薫が考える素振りを見せたので > b r <

> b r <

和泉は安堵の面持ちでウインナーコーヒーを啜った。 > b r <

> b r <
俺は篠原にも意見を仰ぐと想い隣に坐る篠原へ呟いた。 > b r <
> b r <
「篠原は希望とか無いのか？」 > b r <
> b r <
篠原は一拍置いて「…ある」と言い魂が抜かれたような > b r <
> b r <
顔をして俺の顔を凝視し続ける > b r <
> b r <
そんな顔で見つめられても何も出ないぞ！ > b r <
> b r <
「なんだ？」俺は聞きながらカプチーノを啜る。 > b r <
> b r <
「図書館」 > b r <
> b r <
「それとも良いとは思うが…今日の面子を見てご覧なさい！ > b r <
> b r <
相応しくない人材が一人いる気がしないか？」俺は胸中で篠原に謝
つた。 > b r <
> b r <
「…理解した！」シヨンボリと肩を下げ前を向き直った！ > b r <
> b r <
「今日のお詫びに今度一緒に図書行ってあげるから気を悪くすんな
よ！」 > b r <
> b r <
俺の詞に反応したのか篠原はゆっくり俺の方を向き > b r <
> b r <
笑みを漏らしながら俺のことを凝視し続けた。 > b r <
> b r <
「まあいいわ、ボウリングにしましょう」 > b r <

> b r <
と薫が大声で叫び店内の客が啞然した。 > b r <
> b r <
薫は出る準備を始めたので俺達も咄嗟に割賦カップに残った珈琲を飲み干す、 > b r <
> b r <
篠原は一度しか口を付けていないエスプレッソを > b r <
> b r <
物欲しそうに見詰めながら一口で飲み干した。 > b r <
> b r <
ボウリング場まではさほど遠くはないが、 > b r <
> b r <
かと言つて近いと言える距離ではない。 > b r <
> b r <
その間みんなで会話を交じりながら徒歩で移動した。 > b r <
> b r <
> b r <
> b r <
俺達は着いた途端、薫がこう言った。 > b r <
> b r <
「ちょうど四人居るから対抗戦で試合をしましょう!」 > b r <
> b r <
つて言いはじめどう決めるのか考えつつ、 > b r <
> b r <
ここは正当にジャンケンだよなって想っていたら…。 > b r <
> b r <
「籤くじで決めましょう」 > b r <
> b r <
など言つて受付カウンターに出向き紙とペンを借りて帰ってきた。
> b r <

> b r <

「ここは正当にあみだ籤ね！」> b r <

> b r <

と言つて紙に縦線を四本引いて横線を適当にあちらこちらに引きまくつてた。> b r <

> b r <

「籤で決めなくてもいいんじゃないか！例えばジャンケンとかさ」

> b r <

> b r <

正当な意見促した！するとムスつとし、> b r <

> b r <

我が子が進学先が無いような事を担任から告げられたような面をして、> b r <

> b r <

薫は俺をメンチ切のまま凝視する。> b r <

> b r <

俺は気分を損ねて視線を篠原へと向けると篠原も俺を凝視していた。

> b r <

> b r <

「はあ！…和泉よ、お前も何か言え！企画者だろ」> b r <

> b r <

「それもそうだが、俺…雅さんが苦手で…。」> b r <

> b r <

「そつなのか？初耳だな！」> b r <

> b r <

「良いけどさ」> b r <

> b r <

「籤でいいから決めようぜ！」> b r <

> b r <

俺は言い放ち薫が書き止め中の紙に文字を付け加えた。> b r <

> b r <
チーム別けも無事終り、試合が開始された。 > b r <
> b r <
俺とコンビになったのは読書マニアに値していいだろう。 > b r <
> b r <
篠原だ！対する挑戦者は…言うまでもない二人である！ > b r <
> b r <
薫が俺の方を見て > b r <
> b r <
「私たちが先攻だからね！」 > b r <
> b r <
つて言われ俺達は自動的に後攻にされた！ > b r <
> b r <
ところで篠原はこういうスポーツは出来るのだろうか！ > b r <
> b r <
疑問が残るので聞いてみる > b r <
> b r <
「篠原はこういう系は大丈夫なのか？」 > b r <
> b r <
「多分」と返答し俺を凝視し始めた。 > b r <
> b r <
「そうか！」 > b r <
> b r <
俺は応え篠原から視線を外したが暫く熱い視線を感じた後、 > b r <
> b r <
篠原に視線をやると篠原が凝視中だった。 > b r <
> b r <
やけに俺を見る数が多ければ見てる時間も長い気がする！ > b r <
> b r <
まさかだと想うが…。 > b r <

> b r <

「篠原って何時、気付くと俺の事見てるけど、> b r <

> b r <

どうしてだ？俺の事が気になるのか？」> b r <

> b r <

「うん」> b r <

> b r <

「それってあれか？」> b r <

> b r <

「安心出来る存在」> b r <

> b r <

「はあ！…解ったよ！でも、誤解される行為は> b r <

> b r <

得に薫の前では控えるようにな！」> b r <

> b r <

「解った！私からも良い？私の事、何時も『篠原』って呼捨てされ

るけど、> b r <

> b r <

苗字では気軽に萌めとかメグちゃんって呼んで」> b r <

> b r <

「あっ！良いけど、どうしてだ？苗字で呼ばれるが嫌なのか？」>

b r <

> b r <

「そうでは無い。私の中で認めた人だけ、> b r <

> b r <

下の名前で呼ばせるのは極、僅かだから…。」> b r <

> b r <

「それで俺が認可された訳ね」> b r <

> b r <

そんな事を話している中に試合は終盤を迎えていた。> b r <

> b r <

薫達は全てのフレームをストライクで来ていたが、> b r <

> b r <

一方俺達はガータを二回ばかり出しすぎてしまいこの時点で俺達は敗北は確定だ！> b r <

> b r <

俺達はボウリング場をあとにして駅前の喫茶店へと足を延ばした！

> b r <

> b r <

> b r <

> b r <

「今日はこれくらいにして明日の身支度した方が良いでしょう！」

> b r <

> b r <

ローズヒップを嚼りながら上機嫌で皆に促す！その時の薫は陽気だった……。> b r <

> b r <

「それもそうだな」> b r <

> b r <

俺は何一つ身支度してなく、制服やらを出さなきゃいけない。> b r <

> b r <

「それにしても西日がきついな。」> b r <

> b r <

こう言っていると向かいにいた篠原が反応して俺の顔を一瞥した。

> b r <

> b r <

そしてその隣の和泉が話に参加して来た。> b r <

> b r <

「席代わるっか？」> b r <

> b r <

「いいのか？」> b r <

> b r <

「全然構わない」> b r <

> b r <

そう言つと席を変え薫がお手洗いに席を立つたので、> b r <

> b r <

都合が良いとばかりに俺の方へと顔を近づけ言つた。> b r <

> b r <

「俺、精神的にきつい物がある。」> b r <

> b r <

ここに坐つてズーと雅さんにメンチ切されまゝ凝視されたら気が狂うになる」> b r <

> b r <

そう言つてアールグレイを一口含んだ。> b r <

> b r <

「そうだろうよ！現に俺がしょっちゅうされてるんだから席替えしたのも納得だ！」> b r <

> b r <

俺はカフェ・オレを口にしながら言つた。> b r <

> b r <

気付くと熱い視線を感じ篠原へ眼をやると俺を凝視していた。> b

r <

> b r <

> b r <

> b r <

それから一時間くらい適当に話をして皆と別れ、> b r <

> b r <

空模様の様に陽気に薫は帰って行つた。> b r <

> b r <

明日から憂鬱な日々が続くと想つと言つまでもなく苦痛でしかない
だろつ。 >br <

>br <
ともあれ明日は古河三高の入学式だ。 >br <

>br <
>br <

完 >br

<

>br <

(四章) (後書き)

この章で取り合えず終わりますが、このタイトル内の話しは今後に
続くプロローグだと想って下さい。

最後に雅シリーズやそれに関わる人名で話しを増やして行きますの
で、

是非ご堪能ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2124k/>

雅 薫の陽気

2010年10月9日07時22分発行